

新病院長に聴く

独立行政法人国立病院機構

岩国医療センター 院長

第16回

田中屋 宏 爾 先生



①病院のご紹介（特色、課題、研修医のことなど）をお願いします。

岩国医療センターは救命救急センターを有し、年間5,000件の救急搬送を受け入れており、山口県東部、島根県の一部、広島県西部の医療圏における高度急性期医療を担っています。また、地域周産期母子医療センターとして新生児集中治療室を備え、市民の方々が安心して暮らし、出産や子育てができる環境を、他の地域医療機関とともに支えてきました。平成25年には、長年親しんだ黒磯という地から、岩国市の中心部に近い愛宕山に移転しました。最新鋭の設備とともに、小児科の外来や病棟の壁に描かれたホスピタルアート、緩和病棟のアニマルセラピーなどの新しい試みを取り入れ、患者さんに優しい病院を目指しています。病床数は486、医師数は約120名で、内視鏡センター、循環器センター、脊椎脊椎センターを整備し、大学病院に準ずる高度な医療を提供しています。ロボット支援手術は泌尿器科領域だけでなく、直腸癌、胃癌、肺癌などでも取り組んでおり、年間140例を超えました。

なお、32の診療科で広範な疾患に対応しておりますが、かつて5名いた精神科の常勤医がいなくなってしまう、精神科医の招聘が喫緊の課題です。また、岩国市は全国市町村の上位3%に入る広い面積を持っており、市の3分の2を占めるへき地医療を支えることも、重要な使命と考えています。

研修医のプログラムは、まずは common

disease を数多く経験する「実践重視」を最優先にしています。ユニークな点としては、米軍岩国基地診療所の研修も選択可能で、毎年10名前後の熱意あふれる研修医を、中四国、九州を中心に全国から受け入れています。

②病院長としての抱負をお聞かせください。

「岩国医療センターに関係するすべての人々を幸せに！」が合言葉です。患者家族だけでなく、地域住民、当院のスタッフ、連携医療機関、さらには関連する業者や行政機関など、みんなが幸せになって欲しいと思っています。国民の税金や社会保障の負担は増える一方で、所得は減り、さらに高齢の一人暮らしや、ひとり親で子育てをしている世帯が増えるなど、ここに来て医療を取り巻く社会環境は大きく変わってきました。医療を通じて、魅力ある街づくりに、そして社会に貢献できれば望外の喜びです。

③岩国市を含め県東部の医療について思うことはありますか。

2019年に厚労省から公立・公的の420余りの病院を対象とした再編統合リストが公表され、「地理的条件の確認から、お互いの機能が類似かつ病院が近接していること。」が、その抽出基準のひとつに挙げられていました。岩国医療圏域では、救急搬送の86%を岩国医療センターが受け入れており、国の描く地域医療構想の観点からは、うまく救急医療の分担ができていると考えられ

ます。しかし、岩国医療センターの機能を補填できる医療機関が乏しく、危機管理の点からは手放しで喜べません。また、回復期を担当する医療機関が少なく、岩国医療センターの入院患者在院日数を短縮できないことが課題に挙げられます。回復期や慢性期の患者さんを受け入れていただける施設の充実が、エリア全体としては必要です。さらに、地域内の産婦人科施設がどんどん減ってしまっており、市民が安心して子供を産み・育てることができる医療体制の維持も、地域の課題の一つに挙げられます。いずれにしても、これまで以上に、医療機関の連携強化が求められますね。

④若手医師に一言お願いします。

当院には、高度急性期を担う野戦病院的なイメージを持たれることが多く、多様性を尊重する今日の社会では必ずしも若手医師に支持されないのでは、という危惧を持っています。これまでのところ、幸い積極的に医療に取り組もうとするモチベーションの高い若手医師が集まってくれています。私たちが行っている地域を重視する考え方とともに、新しい医療にも興味を持っていただけているという印象です。

最近の若い医師や、学生さんは、社会勉強のためにサービス業のバイトを経験していたり、外国語をマスターしていたりと、とてもしっかりしていて、むしろ感心するばかりです。私自身は、学生時代、ろくに勉強もせずに、ボート部の活動オンリーで過ごしましたので、私から若い医師に、特に言えるほどのことはございません。ただ、他の人がやらない事に挑戦することは好きなので、何かお手伝いできることがあれば、お声がけください。

⑤先生ご自身のこと（出身、学校、趣味、座右の銘など）について教えてください。

私は、岩国市で生まれ育ちました。地元の岩国高校から岡山大学に進み、平成5年から当時の国立岩国病院に着任しました。以来、30年間にわたり外科医として務めてまいりました。趣味はジョギングやスキーです。また、がんを何度も繰り返し発症する患者さんを担当したことがきっか

けで、遺伝でがんを発生する疾患の臨床、研究や、患者会活動の支援にも取り組んでまいりました。現在、大腸癌研究会の遺伝性大腸癌委員会で、ガイドラインの作成などにも携わっています。

「黙々徹底」という言葉を座右の銘としています。この書の額が、高松市にある私の家内の実家に飾ってありました。筆者の林 秀一氏はかつて岡山大学法文学部の教授を務められた方で、岡山大学空手部の初代部長でもあったとのこと。私の家内の父が同じく岡山大学で空手部だったこととも、おそらく無縁ではないでしょう。私が見た書とは別に、林氏は色紙も残しておられるようで、それには黙々徹底の言葉の後に、以下の文章が続くらしいです。「世の中には誰もやりたくないが誰かがやらねばならないことが沢山ある そうしたことを指図されないでも 黙ってトコトンまでやり貫ぬく人間になりたい」

⑥山口県医師会の広報委員会に何かアドバイスがあればお願いします。

広報やブランディングは、今日、とても重要な役割を果たしていると思います。県医師会のホームページから、利用しやすい「申し込みフォーム」が提供されており、素晴らしいと思いました。なお、強いてあげるとすれば、市の医師会や日本医師会とも、申し込みフォームを統一させることができれば、さらに良くなりますね。また、動画配信や、他のSNS媒体での情報提供も、県医師会の素晴らしい仕事を多くの方に知っていただくことに有効かもしれません。広報を担当される方々には、大変感謝しております。これからも、どうぞよろしくお願いします。

県下唯一の医書出版協会特約店

医学書専門 井上書店
看護学書

〒755-8566 宇部市南小串2丁目3-1(山口大学医学部横)
TEL 0836(34)3424 FAX 0836(34)3090
[ホームページアドレス] <http://www.mm-inoue.co.jp/mb>.
新刊の試覧・山銀の自動振替をご利用下さい。